
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 92

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1821. いつかのクリスマス:ヴァン・ゴッホ書簡全集の到着
- 1822. 確信と有形無形の恩恵
- 1823. 二人のカルロス・ゴーン
- 1824. 原則の原則たる所以の解明に向けて
- 1825. 欧州での学会について
- 1826. 虹色に輝く曲の夢
- 1827. 3+3+3 or 4+4+4
- 1828. 非明示的な作曲理論の把握に向けて
- 1829. パターン認識と階層的な法則群
- 1830. マリア・ジョアン・ピレシュのコンサート(前編)
- 1831. マリア・ジョアン・ピレシュのコンサート(後編):鳴り止まない拍手と終わりなき感動の中で
- 1832. 幸福への小さな工夫と心がけ
- 1833. データの定量化に関するアイデア
- 1834. 時系列データの解析について
- 1835. アルベルティ・バスの適用実験
- 1836. 日記的作曲の実現に向けて
- 1837. 文献調査の進展
- 1838. 刹那の遙か先に待つ日本
- 1839. ゴッホの手紙
- 1840. 手紙という表現形式について

今日は雨が降らず、雲の隙間から時折晴れ間が顔を覗かせていた。一方で、今日の気温はとても低かった。最低気温はマイナスを記録していたようだ。明日も同じような気候になるらしい。しかし、明日は今日よりも雲がなく、晴れるそうなので、昼食前にランニングに出かけたいと思う。

今日は確か金曜日だったと思うが、どこか週末の気配を漂わせている。そう思わせるのは、静かな時の流れと、何とも言えない哀愁に満ちた景色が目の前に広がっていることに起因する。

昼食を摂った後、複雑性科学の手法を教育研究に適用した論文が数多く集められた専門書を読み進めていた。第六章までを読み終えたところで、私は一旦手を止め、昨夜取り掛かっていた曲の修正を行うことにした。数十分ほど曲に手を加えたところで、とりあえず形となった。

今回の作品は初めてワルツ形式を試したものであり、またしばらく経ってからワルツ形式の曲に挑戦してみたいと思う。ワルツ形式の伴奏を適用することが初めてであったため、うまくいかないことが多々あった。だが、それでも何とか自分なりの工夫を凝らし、ひとまずは曲の形となった。

曲を作り終えた後、いつものように仮眠を取った。タイマーとして設定しているバッハの曲が鳴り響く数分前に、眠りの意識から覚醒意識に移行したことを察知した。コーザル意識からサトル意識へ移行する瞬間を捉えることが時折あるのだが、まさに今日はそのような日だった。より厳密には、サトル意識の中で夢に似たビジョンを見ている時に、すでにそれがサトル意識内の現象であることを理解し、そろそろタイマーとしてのバッハの曲が鳴るという予感があったのである。

タイマーが鳴る直前に見ていたのは、どうやら昨夜の夢の続きのようだった。そこには叔父の姿はなかったが、母の姿があった。

20分間の仮眠の最中にこうした鮮明なビジョンを見ると、その後の目覚めが普段とは異なったものになる。残念ながら、その差はその時々々のビジョンの質に影響を受けるため、その差がもたらす感覚を一般化することはできない。

目覚めてから再び先ほどまで読んでいた専門書の続きを読み始めた。するとしばらくして、突然家の呼び鈴が鳴った。どうやら荷物が届いたらしい。ちょうど私は数日前に、“Vincent van Gogh - The Letters: The Complete Illustrated and Annotated Edition (2009)”という、現存するゴッホの全ての手紙の英訳と、研究者によるその手紙に対する注釈、そして手紙と関係した絵画作品の挿絵が盛り込まれた全六巻にわたる書籍をイギリスの書店に注文していた。この書籍が届くのは来週の火曜日辺りとのことであったため、呼び鈴がなり、郵便屋が届けてきた荷物は私のものではなく、隣人のものではないかと思った。しかし、階段を降りてドアを開けると、確かに私の名前が記載された郵便物だった。

体格のいいオランダ人の郵便屋であっても、その郵便物を見るからにとっても重そうであり、実際にその大きさと重さはなかなかのものであった。その大きさを見たときに、それは確かに私が注文したゴッホの書簡集であることがすぐにわかった。

私は高鳴る心を抑えきれないまま、すぐさまその重たく大きい郵便物を三階まで持って上がった。ゴッホの全六巻にわたる書簡集は、本当に大きく重たい。おそらく、これまで購入した全集の中でも最大のものではないかと思う。

私は大きな段ボールを開け、その中からゴッホの書簡集が顔を見せた時、たまらなく嬉しくなった。それはまるで、幼少時代のいつかのクリスマスに、クリスマスプレゼントとして大きな生き物図鑑を受け取った時の気分であった。ゴッホの書簡集を実際に自分で手に取った時の気持ちは、本当にあの日のクリスマスの気持ちと瓜二つであった。

第一巻の中身を早速確認すると、ゴッホの内面世界が絵画で埋め尽くされていたかのように、その中身はゴッホがテオに宛てた手紙で埋め尽くされていた。手紙は実に優れた英訳が施されており、さらには手紙の横に研究者による様々な注釈が施されていたり、他の手紙へのレファレンスなどが記載されている。こうした付随的な情報をもとに、ゴッホが残した手紙の全てを多角的かつ包括的、さらには深く読み解いていくことができる。

手紙に対応する形で挿入されている絵画作品を眺めていると、自分が完全にゴッホの内面世界と同一化していくような感覚に見舞われた。この全六巻にわたる書簡集の重みは、単にゴッホが無数

に残した手紙と絵画作品によるものではなく、ゴッホの魂の重みなのだと思えて仕方なかった。

2017/11/24(金)16:00

No.466: Reading Collected Works of John Dewey

I just finished reading the introduction of the collected works of John Dewey. It already foretold me that I could learn deeply from Dewey. In particular, I will closely read his philosophy of education and aesthetics. Also, my interests focus on his theory of meaning and knowing. In other words, I am intrigued by his epistemology. In addition to the topics, my curiosity lies in Dewey's intellectual development. I will be able to grasp how he developed his philosophical systems after I finish reading this book.

Like his contemporaries such as Charles Sanders Peirce and William James, Dewey is a prolific scholar, and he would develop his philosophy by writing—and by doing. 15:07, Monday,

12/4/2017

1822. 確信と有形無形の恩恵

夕食時に口にした有機栽培のトマトがとても美味しかった。季節の変わり目からか、トマトにも変化が起こったのだろうか。非常にみずみずしく、果肉が重厚であった。

毎晩欠かさずに大きめのトマト一つを、行きつけのチーズ屋で購入しているチーズと共に食べる。その組み合わせにはいつも舌鼓を打っているが、今日はいつも以上に舌を鳴らしていたように思う。

食卓の窓から見える三日月は昨夜と異なり、雲に隠れたり現れたりを繰り返している。夕方、黒いちぎれ雲を眺めながら、その光景はどこかで見たことがあると思った。記憶を遡っていると、昨年訪れたデン・ハーグのマウリッツハウス美術館で見た、フェルメールの『デルフトの眺望』の中で描かれているような雲だった。私はぼんやりと雲を眺めながら、今から350年ほど前にフェルメールもオランダの地でこのような雲を眺めていたのかもしれない、と思った。

夕方ぼんやりと雲を眺め、再び仕事に取り掛かった。今日の仕事も実に充実しており、諸々の事柄が計画通りに進んでいった。ちょうど夕方に、研究アドバイザーのミヒヤエル・ツシヨル教授から、先日送った研究計画書へのフィードバックが返ってきた。研究計画が優れている点を指摘してくれた後に、今後に向けての助言をいくつかもらった。明後日の午前中に、ツシヨル教授からのフィードバックを元に研究計画をさらに一歩前に進めようと思う。

午後五時過ぎを迎えた頃、空は完全に闇に包まれた。闇に包まれた空を仰ぎ見ながら、この冬を何とか乗り越えられるという確信を得た。その確信をもたらしたのは、本日の午後に届いたゴッホの書簡集だった。「この書簡集と共に歩めば、この冬を乗り越えていくことができる」という確信が芽生えたのである。これから私はおそらく、ゴッホが書き残した手紙を一つ一つ丹念に読んでいこう。

決して焦ることなく、一つ一つの手紙をゆっくりと読んでいく。自らの日々の歩みの速度に合わせて、ゴッホの足跡を辿っていくのである。

ゴッホの一つ一つの手紙は、間違いなく今の自分を前進させてくれる何かを秘めている。そうであるからこそ、ゴッホの手紙の全てが、今自分の書齋の中に存在しているのだと思う。

今このようなことを述べるのは時期尚早かもしれないが、私はオランダに来ることができて本当に有り難く思う。この国で生活を始めてまだ一年半ほどだが、この期間にどれほどの有形無形の恩恵をこの国から享受してきただろうか。ゴッホとの深層次元での邂逅もまさにそうした恩恵の一つである。

見えない力の働きが、自分を前に進めていく。明日もそうした力によって、私はまた一つ前に進んで行くのだろう。2017/11/24(金) 19:46

No.467: Research Meeting

I had a research meeting with my supervisor and my group member who is my friend. Three of us discussed our research topic for two hours. Today's meeting was very helpful as usual in that it

provided me with clear directions for the next step. Actually, there are several things to do for me. First, I need to clarify how to quantify my data.

My present quantification idea is to count course relevant words in every sentence in a lecture of a MOOC. My supervisor advised me to do it automatically with a specific algorithm. This advice was beneficial because I planned to quantify my data manually. Instead of manual quantification, I can automatically quantify my data by using an algorithm with R. Perhaps, I have to examine some programming codes for doing it. The quantification procedure may be similar to a text mining method. I will check how to do text mining with R, which would not be so difficult. 18:19, Monday, 12/4/2017

1823. 二人のカルロス・ゴーン

闇と無音から始まる土曜日の朝。今朝は六時前に起床し、六時過ぎから仕事を開始させた。

先週の今頃は自宅を出発し、デ・ホーヘ・フェルウェ国立公園へ一泊二日の旅に出かけていたことが今となっては懐かしい。あれから早くも一週間が経った。

欧州での生活は、このように日々の活動を書き留めておかなければ、その日一日がどのように過ぎていったのかがわからなくなってしまうぐらいに素早く流れていく。肯定的な側面として、おそらくこうした時間の流れこそが、流れの奥の流れ、つまり時の流れぬ時間なのだろう。

今私は、永遠世界に足を一步踏み出しているような状態にいるような気がしている。永遠の確からしさの中で日々の生活と仕事を営むことができていることは大変喜ばしい。今日も時の流れぬ世界の中で静かに生活と仕事を営んでいきたい。

書斎の外の闇の世界のどこかで、小鳥が鳴き始めた。小鳥の鳴き声の一つ一つに促されるかのよう、私は昨夜の夢の断片を一つ一つ思い出していた。昨夜は夢の中で、日本にいながらにして、友人とどこか遠くの国へ旅をする計画を立てていた。当初の予定では、欧州のどこか風光明媚な場所に旅をしようという計画になっていた。しかし、計画を練り始めてみると、アフリカ諸国に旅をす

るのも悪くないのではないかと、という意見が出始めた。いくつかの国を候補に挙げ、そこから候補を絞るために、それらの国についてさらに綿密に調べることにした。

結果として、三つほどの国が残った。私たちはそれら三つの国に向けて早速準備をし始めた。だが、準備が進むにつれて、どうやらそれらの国に行くことはあまり魅力的ではないことがわかってきた。そのため、アフリカ諸国に行く代わりに、私たちは近くの海に行くことにした。

季節は夏のような感じだった。一人の友人が車を走らせて、私の自宅まで迎えに来てくれた。助手席にはすでに誰かが座っているようだったので、私は後部座席のドアを開けた。すると、友人以外に二人の外国人が車の中にいた。助手席に座っていたのはカルロス・ゴーンであり、後部座席に座っていたのは1mに満たない人形のようなカルロス・ゴーンだった。助手席に座っていたのが、現在のゴーン氏であり、後部座席に座っていたのは、人間のようで人間ではない、パペット人形のようなゴーン氏だった。

車に乗り込んだ瞬間に、私はまず友人に挨拶をし、その後に助手席のゴーン氏に挨拶をした。ゴーン氏の英語は流暢であり、ゴーン氏と私は初対面だったが、お互いの会話はとても弾んだ。

会話がひと段落すると、私は自分の横にちょこんと座っている人形のようなゴーン氏の存在に再度意識が向かった。こちらのゴーン氏にはまだ挨拶をしておらず、そこでようやく挨拶をした。この人形のようなゴーン氏の性格は暗くなく、どちらかというと明るい。しかし、口数はそれほど多くなく、こちらから話しかけなければ何も口を開こうとしないかのような感じだった。

私の前の助手席に座っているゴーン氏に対して、最近日本で特集が組まれたビジネス雑誌にゴーン氏を取り上げられていたことを話した。特集記事の中では、役員報酬のランキングの上位にゴーン氏の名前が挙げられており、さらにはゴーン氏の部下育成の厳しさとその背後にある意図について解説がされていた。それらの話題について、こちらからあれこれと質問をしてみた。助手席に座るゴーン氏は、絶えず上機嫌に私の質問に答えてくれた。

役員報酬のランキングの上位にゴーン氏が挙げられていることを伝えた時、私の隣に座っていた人形のようなゴーン氏が驚いたかのように目を丸くし、「そうなのか！」と前のめりになりながらつぶやいた。

助手席のゴーン氏は笑顔のまま、後部座席から落ちそうになった人形のようなゴーン氏を落ち着かせるような身振りをした。

海が近づいてきたところで、車が一旦停車し、もう一人の友人をそこで拾った。その友人は車のドアを開けた瞬間に車内にゴーン氏がいることに気づくと、ひどく驚いた表情を見せた。しかし、彼は以前自分の会社を経営していたことがあり、今でも会社経営に関して多大な関心を寄せているために、ゴーン氏と話す機会に恵まれたことをとても喜んでいるようだった。

その友人は、人形のようなゴーン氏の右横に座った。その友人は、少しばかり緊張しているようであり、遠慮がちに人形のようなゴーン氏に話しかけた。

友人：「Wh, what's your name?」

人形のようなゴーン氏：「!？」

友人からの質問に対して、人形のようなゴーン氏は一瞬驚いたような表情を見せたが、すぐさま大きな笑い声を上げた。

友人：「あっ、ゴーンさんだと知ってるのに間違っって名前を聞いてしまった・・・苦笑」

後から車に乗り込んだ友人がゴーン氏を前に緊張しているのはすぐさま見て取れたが、まさか、すでに名前を知っている人に名前を聞くとは思ってもみなかった。しかし、友人のその質問によって車内の空気はさらに和やかなものになった。その後も会話が尽きることはなく、海に到着するまで私たちは会話を楽しんでいた。

海岸に到着すると、夏の太陽が静かな海の海面に反射してとても眩しかった。私はすぐさま裸足になり、砂浜の熱さを感じながら、波打ち際に向かった。果てしなく広がる海を眺め、視線を遠方から近くに移した。いざ海に入ろうかという瞬間に、波打ち際から数メートル先に、サメの背びれが見えた。それが見えた瞬間に、私は海に入るのをやめた。そのサメはそれほど大きなものではなく、人食いザメではなさそうに見えたが、それでも人間に危害を加えることのできる種類のサメには違いなかった。

私は波打ち際から後ずさりをするように、サメの姿を見ながら海から離れていった。熱い砂浜を裸足
で引き返しなが、私は車のある方向に向かっていった。

友人とゴーン氏たちは、どうやら山の方にある小屋でひと休憩をしているようだった。私はもう一度、
灼熱の太陽に輝く海を眺め、波打ち際にいるサメの背びれを見てから、小屋のある方向に向かっ
てゆっくりと歩き出した。2017/11/25(土)06:55

【追記】

先日、夢の中で、ある知人の方が現れた。その方とは一年以上も連絡を取っていなかったのだが、
驚いたことに、その夢の翌朝にその方から一通のメールが届いていた。

上記の夢の中には、カルロース・ゴーン氏が登場していたが、その夢からおよそ一年後の2018年11
月19日午後にゴーン氏は逮捕された。夢の中で水面下にいたサメは、ゴーン氏の逮捕の一件の背
後にある何らかの力を象徴しているのだろうか。夢と現実世界が奇妙にシンクロナイズしているのを
感じる。フローニンゲン:2019/1/4(金)10:17

No.468: Quantification Criteria for Text Mining

I determined how to quantify the data for my research on MOOCs. Before applying a text mining
method, I have to specify terms that I will investigate. The criteria should be derived from the
introduction of each lecture.

The MOOC that I will examine offers a brief introduction for each lecture, which can be used for
generating the criteria. Initially, I tried to determine which terms are course relevant, but the
process is not so objective. Since there are no specific theories to decide which terms are course
relevant, I have to set benchmarks for sifting out terms.

My first step would be to examine all introductions and to identify course relevant words, then
the next step would be to make a list of the words. Once I make such a list, I can conduct text
mining for the data. 19:46, Monday, 12/4/2017

1824. 原則の原則たる所以の解明に向けて

いつもは全ての仕事が終わった後にしか作曲実践に取り組まないのだが、昨日は昼食後に少しばかり作曲する時間を設けた。作りかけのワルツ形式の曲があと少しで一通り完成するため、その完成に向けて手を動かしていた。30分ほど手直しをしたところで、曲を一旦完成させることができた。今回ワルツ形式の曲を初めて作ってみて、当然ながら困難なことの方が多かったが、様々な発見や気づき、そして新たな問いがもたらされ、大変実りの多い実践だったように思う。

そこから就寝までは再び学術研究に時間を充てていた。就寝前にも作曲実践を行い、今度は新しく、最も単純な二部形式の曲を作ってみることにした。反復記号を用いて、16小節ほどの短い曲を程なくして作ることができた。二部形式の曲にはいくつかヴァリエーションがあるようであり、それらを今後試し、近いうちに三部形式の曲を作っていこうと思う。

現在は、作曲理論のテキストに記載のある項目の一つ一つを辿りながら、それらを一つずつ実験的に試すかのように、それらの項目を一つ一つ意図的に曲に適用させている。こうした意識的な実践をこれからも継続して行い、一つ一つの項目に関する理解が実践を通じて真に深まってくると、それらの部分は全体としての機能を発揮し始めるだろう。つまり、今まさに作ろうとしている曲に最適な技術をその場で即興的に選び、複数の技術を組み合わせ、組み合わせられた技術が一つの新たな技術の総体として音楽世界の中に立ち現れるようになるだろう、ということだ。

それに向けて、今はとにかく、作曲理論のテキストに書かれていることに忠実になり、それを一つ一つ作曲実践の中で活用していくことを行う必要がある。テキストに記述されていることに対して、基本的には忠実に従いながらも、それから逸脱した方法を試すとどうなるのだろうか、という問いが絶えず私の脳裏をかすめる。実際のところ、昨日作っていたワルツ形式の曲も、テキストに書かれていたことを少し逸脱するようなものになっている。

テキストの記述によると、ワルツ形式の曲は3/4拍子のものが圧倒的に多いそうだ。しかし、私はあえてその拍子とは異なる拍子を選択して曲を作ってみた。もちろん、最初から原則と離れる形で曲を作ってしまったがゆえに、大きな困難に直面したことは間違いない。だが、原則から逸脱した形で曲を作ることによって、原則が原則たる所以の一端を垣間見ることができた。今はまだ、その一端を

掴んだ状態ではない。しかし、なぜワルツ形式は3/4拍子を原則とするのかに関する理由の背中が見えたのだ。それをもたらしたのは、原則からあえて逸脱する形で曲を作ろうとし、その過程の中で試行錯誤をしたからに他ならない。

原則に則って曲を作っていくことと、原則からあえて逸脱する形で曲を作っていくことの双方をこれからも意識したいと思う。私は決して、音楽学校という学術機関の中で作曲を行っているわけではないのだから、自分なりに原則を学び、原則から逸脱する自由な試みが許容されているはずである。その恩恵を行使しないわけにはいかない。

就寝前に、やはりワルツ形式が気になっていたのか、ショパンの楽譜を取り出し、ショパンが作ったワルツの楽譜を眺めていた。ワルツ形式の全ての曲の楽譜に目を通したところ、それらは全て3/4拍子であった。ここから改めて、ワルツというのは3/4拍子が原則なのだということを生きた事例から学んだ。あのショパンですら3/4拍子のワルツしか作らなかったということの裏には、やはり原則が持つ重要な何かがあるに違いない。

その他に試してみたいことが幾つかあるため、ワルツ形式の曲を作るのはまたしばらく後になるだろうが、次回ワルツ形式の曲を作るときには、原則の3/4拍子を採用し、原則が原則たる所以について探究を深めていきたいと思う。2017/11/25(土)07:23

No.469: Idea for the Quantification in My Research on MOOCs

After I examined the interface of the MOOC that I will investigate, I came up with the idea that I would create the quantification criteria based not only on the introduction of each lecture but also on learning goals of the course. This idea can work very well for making cogent benchmarks for quantifying lecture contents and learners' comments on discussion forums. 20:07, Monday, 12/4/2017

1825. 欧州での学会について

午前中の仕事のはかどり、今日は昨日に計画していたように、昼食前にランニングに出かけた。今日はノーダープラントソン公園ではなく、近くの河川敷の横にあるサイクリングロードを走った。

快晴とまではいかないが、穏やかな太陽光が差し込む中を走ることができた。一週間に一回ほど走
ることは、心身の調整に大きく役立っている。走る回数は一週間に一回とし、用事がある
ときは全て歩くようにしているため、日常生活の中には常に適度な運動がある。適度な運動や良
質の食事と睡眠が、毎日の私を支えている。

先ほど、研究計画に対して研究アドバイザーのミハエル・ツシオル教授に送ってもらったフィードバ
ックを読んでいた。ツシオル教授は基本的に土日も研究活動に従事しているため、土日であ
ってもメールの返信が来る。指導教授の研究熱が指導を受ける者に伝わるのは必然であ
らう。

ツシオル教授からのフィードバックコメントはいつもの確に本質を突いており、研究を進める際にも論
文を執筆する際にも、大きな助けとなっている。ツシオル教授からの親身な指導を受けながら、今年
も新たな研究に打ち込みたいと思う。とりあえず、数日前に送られてきたフィードバックコメントを何
回か繰り返し読み、月曜日のミーティングに向けて研究をさらに前に進めたいと思う。

フィードバックコメントに合わせて、ツシオル教授から来年の六月に開催されるロンドンの学会に関し
て言及があった。呑気なことを言うと、学会の場は自分の作品の展覧会や発表会のような場として
の役割を持っており、そこに出掛けて行く時はいつも気分が高なる。そういえば、これまでロンドン
のヒースロー空港に降り立つことは何度かあったが、ロンドンの街を歩いたことは一度もないことに
気づいた。今回の学会の際には、ロンドンの街を歩き回り、大英博物館に是非とも足を運びたいと
思う。

実は今週末にフランスのリヨンで行われる国際ネットワーク科学学会に参加しようと思っていたが、
今抱えている仕事の状況から考えると、参加をするのは賢明でないと思われた。また、ネットワー
ク科学に関する論文をまだ一つも書いておらず、その学会に単なる聴衆として参加するのもそれほど
意味がないと思った。

リヨンという街にも関心があり、学会の際にリヨンの街をゆっくりと見て回りたいと思っていたのだが、
またの機会に譲りたい。もちろん米国で学者として生活をしていても、欧州の学会に参加しようと思
えばいくらでもできるのだが、移動を考えると、やはり欧州の土地で研究をする良さの一つは、欧州
各国の様々な場所で開催される学会に気軽に参加できることにあるように思う。

今はまだ自分の研究を一つ一つゆっくりと進めている最中であり、研究発表をしないのであれば学会に足を運ばないようにしているため、数多くの学会に参加することはできていない。しかし、今後はより自分の研究を前に進めていき、様々な国の様々な場所で開催される学会に積極的に参加したいと思う。当面は、来年の五月の阿姆斯特ダムでの国際ジャン・ピアジェ学会と六月のロンドンでの国際学習科学学会に参加する予定である。2017/11/25(土) 14:26

No.470: Unknown Fatigue

I was and I am feeling fatigued a little bit, but I cannot identify the reason. I took a nap after lunch as I do everyday, yet I slept longer than usual. After eating dinner, I had the same kind of exhaustion. I just relaxed for a while to recuperate my energy.

I do not know the reason of the fatigue, but probably because of the current unstable weather. I just wrote down my mental and physical condition to record my daily state. I can utilize this empirical data someday. 20:14, Monday, 12/4/2017

1826. 虹色に輝く曲の夢

昨夜は少し調べ物をしており、就寝時間が遅くなった。そのため、今朝は六時半過ぎに起床し、七時から本日の仕事を開始した。

調べ物の都合上、昨夜は音楽理論を学習するだけとなり、作曲実践をする時間がなかった。そうしたこともあってか、音楽に関する夢を昨夜見た。夢の中で私は、七色に光る音楽を見た。それは自分で作った曲ではなく、さらには人が作ったとも思えないような曲だった。

夢の中で私が見ていたのは、七色に光る曲の波形だった。突然目の前に音の波が現れ、曲の進行と共にそれが変幻自在に色を変えていくのである。曲の音色と雰囲気はショパンの曲を思わせた。しかし、それは自然やあるいは別の世界から降りてきたような音楽だった。

私はただ、曲の進行に合わせて変化する音色を耳で追い、波の色の変化を目で追いかけていた。聴覚と視覚、さらには他の感覚も満たされたような気がした。それほどまでに、その曲の音色と変幻自在に変化する波の色は美しかった。同時に、私は一つの確信を得ていた。

「こうした曲であれば自分でも作れるかもしれない」

私はそのようなことを思った。七色に変化し、光り輝く音色を作れるかもしれないという不思議な確信を夢の中で得ていた。もちろん、それは今すぐにではない。だが、いつか必ず今目の前に現れているような曲を作ることができるだろう、という確信があったのだ。

夢の中に現れていた七色に光り輝く曲は、何かを啓示していた。それはまるで、自分が追求すべき美の本質であるかのように思えた。

夢の中には、その他に登場人物はおらず、その場にいたのは私だけだった。その瞬間、自分の存在は、今目の前に現れている虹色の音楽に他ならないことを知った。このように時の経過に応じて変幻自在に変化する音のような特質こそ、自分の存在の本質に他ならない。そのようなことを思った。

夢から覚めてみても、夢の中で見た、自己の存在の本質を示す虹色の曲を忘れることができない。私はすぐに、夢の中で見ていた映像を作曲ノートに書き留めた。波の色は玉虫色に輝いており、波の波形はフラクタル構造を持つ、ということを書き留めておいた。

今夜は、ポルトガルのピアニストであるマリア・ジョアン・ピレシュのコンサートに出かける。昨夜の夢は、今日のコンサートの前夜祭であったかのようだ。2017/11/26(日)07:16

No.471: The Monte Carlo Method or Nonparametric Tests

I want to compare fractal dimensions of course lectures with those of learners' online comments on each lecture. However, the problem is that I have only seven fractal dimensions in each dimension. To evaluate statistical significant of the correlation, I have to consider the application of the Monte Carlo method that I learned last year. Another possibility is to use nonparametric tests because the data may not fit a normal distribution. Anyway, I should be careful with what kind of statistical methods I will use in my research. 20:55, Monday, 12/4/2017

昨夜、調べ物をしている過程で、自分のこれからの探究生活のあり方について少しばかり考えていた。英文日記の執筆を通じて、どうやら自分が理想とする探究時間の配分があるらしいことがわかった。その日記によると、毎日の仕事の中で、研究論文の執筆に三時間、日記やエッセイの執筆に三時間、作曲実践に三時間の時間を充てることができれば理想である、と書かれている。あるいは、それぞれの時間を四時間ずつにすることができればなお望ましいとのことであった。

もちろん、研究論文の執筆に毎日三時間充てることができれば、それは理想的なペースで論文を書き上げていくことができる。しかし、実際には文献調査とそれを読み込む作業などがあるため、毎日三時間や四時間の時間を完全に文章の執筆に充てることは現段階では難しい。しかし今後、自分の中で巨大な知識の体系が構築されてくればくるほどに、文献を読む時間よりも、文章を執筆する時間を多く確保できるのではないかと思う。

私は欧州での生活が二年目を迎えたあたりになってようやく、一日中、学術論文や専門書を読むことが、自分の精神にあまり良くない影響を与えることに気づき始めた。毎日、集中して数時間ほど論文や書籍を読むことができればそれで十分であり、10時間以上も文章を読み続けるのは不健全な探究生活のように思えてきたのである。日々日記を執筆するというのは、そうした状態に調和をもたらしている。おそらく、気がつかない形で、毎日合計で三時間くらいは日記の執筆に時間を充てているように思う。

早朝に少しばかり日記を執筆し、その後に過去の日記を数本ほど読み返し、編集作業を行う。その後、自分を捉えて離さないものがあれば、午後や夕方、あるいは夜にその都度日記を執筆するというを行っている。往々にして、一つの論文や専門書のいくつかの章を読み終えた後に、何か文章を書き留めておこうという衝動が芽生えることが多い。その衝動に従う形で文章を書いていると、さらに思わぬ発見があり、それについてまた文章を書くという連鎖が起こることがある。そうこうしていると、毎日おそらく三時間近くは必ず日記と向き合っていると思う。

学術研究と日記の執筆に合わせて、やはり作曲実践が自分の生活の中に入ってきたことは極めて重要だった。その重要性は単純に、自然言語の世界から音楽言語の世界という、大きく異なる別の

言語空間を横断するという意味だけではない。もはや言葉による理由付けを受け付けない、宿命的な何かが作曲実践にあるような気がしている。

作曲実践を始めて、まだ数ヶ月ほどである。今ようやく、作曲実践が日々の習慣として定着しつつあるように思う。ここからより本格的に作曲実践に取り組んでいきたいという強く明晰な意思がある。ピアノ曲だけに特化し、自分の日々の生活の中で湧き上がる思念や感覚を曲にしていくという、ある種の日記的な曲を作り続けていく。それはデッサンのようなものであり、本格的な絵画ではないかもしれない。しかし、まるで日記を綴るかのよう、毎日絶えず曲として日記を綴りたいのである。

そうしたジャンルがないのであれば、そうしたジャンルを確立すればいい。自分が求めているのは、日々の瞬間瞬間を曲として表現することである。

画家がデッサンを描くように、今自分が毎日日記を執筆しているように、曲として自分の日々を表現していくのである。私が作曲に持たせている役割は、それ以上でもそれ以下でもない。

この世界で日々生きた証を曲として残しておくことだけが焦点だ。学術研究と日記に関しては、もはや確固たるリズムと方法が確立されている。あとは作曲実践に関しても、作曲理論や音楽理論を学ぶ時間を含め、毎日三時間ほどの時間が取れば理想であり、それが実現されれば、日々の生活はさらに充実感と幸福感に満たされたものになるだろう。2017/11/26(日)07:38

No.472: A Piece of My Recollections

Where is the location of our memories not in a cognitive science sense but in an existential sense? I often experience that a memory evokes other memories that create the kaleidoscopic perceptual reality. I composed a piece of music that represents a part of my recollections at my school age. These memories often flood into my inner realm. 08:53, Tuesday, 12/5/2017

1828. 非明示的な作曲理論の把握に向けて

今夜は、マリア・ジョアン・ピレシュのコンサートに出かける。会場は、フローニンゲン中央駅の近くであり、歩いて30分ほどで到着する。今夜のコンサートに参加することに伴い、今日は夜に作曲実践ができないだろうと思われたため、早朝に一時間ほど時間を取った。この実践を通じて思ったが、

毎日夜に作曲実践をするだけでなく、朝に一時間ほど時間を設けて作曲することを習慣にするのもいいかもしれない。

文章の執筆にせよ、作曲にせよ、それをどの時間帯に行うのかという文脈条件は、文章や曲の種類や質に少なからず影響を与える。そうしたことから、夜だけではなくて、朝の時間帯にも何とか作曲ができるように朝の習慣を見直したいと思う。一時間ほどの時間を確保できれば理想だが、それが難しければ、30分であってもいい。短くてもいいので朝にも作曲実践を行いたいという思いが強くなってきた。

今朝の作曲実践を通じて、自分なりの作曲理論をこれから構築していくことを本格的に行っていこうと思う。それに向けて、まずは勿論、既存の作曲理論を習得しなければならない。

日々地道に進めている作曲理論の基礎的なテキストは、作曲理論の基盤を構築する上で極めて重要だ。引き続き、三冊ほどの入門的な作曲理論のテキストを繰り返し読み、合わせて音楽理論のテキストを繰り返し読み込んでいきたいと思う。

何はともあれ、基礎的な作曲理論と音楽理論を自分の血肉にしていく必要がある。そこから行うべきことは、過去の偉大な作曲家が残した作曲理論のテキストと実際の楽譜から、彼らが築き上げた理論を学んでいくことである。しかし残念ながら、現代の作曲家が残した作曲理論のテキストは存在していても、例えば古典派やロマン派の作曲家が解説をした作曲理論書というのは存在していないのではないかと思う。

実際に、私がこれから読んでいこうと思っている応用的な作曲理論の書籍の著者は、軒並み現代の作曲家に括られる人物ばかりである。そのため、作曲理論と音楽理論の基礎を固めたのち、テキストとして次に取り掛かるのは、そうした応用的な作曲理論の解説書となる。一方で、それに並行して、生きた事例から暗黙知的な作曲理論を学ぶことを積極的に行っていきたい。具体的には、古典派やロマン派の偉大な作曲家が残した楽譜を参考に、一つ一つの楽曲に適用されている非明示的な理論を解明していくのである。これはある意味、詰将棋を自らに課すかのような形で進めていきたい。例えば、ある楽曲の一つの小節を例にとり、一つか二つの音符の配列を見て、その後に続く音符の配列を理論的に予測するのである。

最初は言葉にならないような直感的な予測になるだろう。しかし、こうした実践を意識的に続け、一つ一つの実践の中から何かを学んでいこうとする姿勢があれば、直感的な予測を通じて、作曲家がその曲に適用した法則を徐々に掴んでいくことができるだろう。この法則は全くもって目には見えない。だが、何らかの法則性が間違いなく存在している。

なぜなら、作曲、もしくは音楽とは必ず何らかの法則性に基ついて生み出されているからである。作曲家にとって、それが意識的であろうと無意識的であろうと関係なく、何らかの法則性に基ついて曲が生み出されているのである。そのため、その作曲家が気づかないような無意識的な法則性にまで踏み込んで把握するように心がけたい。

最初は、一日に一つか二つの小節を楽譜から抜き出し、それを作曲ノートに書き留める。そして、そのノートを眺めながら、どうして音符がそのような配列になっているのかを考察していく。もしかすると、一曲全体を通してしかわからないような事柄もあるかもしれない。なぜなら、曲の意味も文章と同じように、文脈を通じて理解されるからである。そのため、一曲全体を眺めて初めてわかることもあるだろうが、当面は少数の小節を精密に分析することから始めていく。

あたかも、毎日詰将棋の問題を何問か解く棋士のように、この実践を自らに課していく。その過程の中で、過去の偉大な作曲家が曲に適用した目には見えない法則性を掴んでいく。この実践を愚直に続けていく中で、徐々に自分なりに作曲理論が構築されていくだろう。2017/11/26(日)15:45

No.473: John Dewey and Music Composition

I will continue to read the collected works of John Dewey. This volume consists of 400 pages, so I expect to finish reading it around the early next week. Today, I will just focus on this book and music composition. I will not do anything other than those. 08:55, Tuesday, 12/5/2017

1829. パターン認識と階層的な法則群

午前中に読んでいた、“The art and science of portraiture (1997)”という書籍は、今後私が芸術に関する研究を進めていく際に非常に有効になるであろう手法を紹介している。近い将来私は、発達研究に並行して、過去の偉大な作曲家や画家が残した実際の作品と手紙や日記などをもとに、定

量的・定性的な研究を行いたいと思っている。定性的な研究をする際に、作品にせよ手紙や日記にせよ、意味の解釈が求められる。こうした解釈を体系的かつ学術的に行うための手法はいくつか存在するが、本書で紹介されている手法は非常に優れているように思える。本書では主に絵画作品の解釈に関する研究方法が紹介されており、それを応用すれば音楽作品の解釈にも適用できるだろう。

こうした研究に着手しようと思った根幹には、自分自身の美学の領域に関する発達現象が存在している。ここ最近私は、美学の領域に関する自らの発達を省みることが多くなり、美的体験の様子が変貌していることを実感していた。そうした体験を深く掘り下げ、自分に何が起こっているのか、つまり自分の美学の発達領域にどのような現象が行っており、当該発達領域は今後どのように発達するのだろうかということを探究していきたいと思うようになった。

欧州での探究生活が進むごとに、美を司る領域に対する関心が日増しに強くなる。実は私自身も、なぜ自分が美的探究に取り憑かれ始めているのかというその本質的な理由はよくわからない。だが、美に魅せられ、美的探究を余儀なくされている自分がいることは間違いない。今は本質的な理由をあえて掘り下げるのではなく、美学の探究の先に何が待っているのかを考えることもなく、自分の関心の赴くままに探究を進めていく。

人間が美を感じ、その美的感覚が深まっていくというのは非常に興味深い現象だと思うのだ。こうした現象を追いかけてみようとする自分の内側には、日常生活の中に美を感じられにくくなっている現代社会への抵抗が潜んでいるのかもしれない。

今はまだ美に関して何も述べることができないが、美的感覚の復権と涵養をこの社会にもたらしたいという思いが私の奥にあるのかもしれない。いずれにせよ、今は自分の関心の赴くままにできる限りの探究を進めていく。それしか今の自分にできることはない。探究の成果がどのようなものとなり、それがこの世界にどのような形で還元されていくのかは今の私にはわからない。また、そうしたことを考えるべき時ではないだろう。

先ほどショパンの楽譜を眺めながら、これから毎朝、16小節ずつ楽譜を分析していく習慣を作り上げていくことにした。まずはショパンの楽譜を取り上げ、その中でもワルツから分析を進めていく。楽

譜を眺めながら思っていたのは、自分の認知特性の一つとして、パターン認識が挙げられるようだ。端的に述べれば、私は現象から法則性を抽出することを極めて好んでいるようなのだ。

楽曲というのは法則性の宝庫であり、楽譜を眺めていると嬉々とした感情が芽生える理由がようやくわかった。さらに気づいたのは、法則性にも次元があり、ショパンはいくつかの階層性のある法則を曲に適用していることがわかった。これはまだ直感的なものであり、今後より詳しく言語化していく必要があるだろうが、複数の小さな法則性を包括する一つ次元の高い法則をショパンは適用していることがわかる。そして、その法則性の次元はいくつかの段階を持つ。おそらく、ショパン以外の偉大な作曲家も、こうした複数の階層性を持つ法則を曲の中に適用しているだろう。

ある程度ショパンの楽譜を分析するまでは、他の作曲家の楽譜を分析しないようにしようと考えているため、そうした比較をするのは今後のことになる。だが、曲の中に潜むパターンとそのパターンを生み出す法則が階層構造を持つということだけを、まずはここに書き留めておきたい。また一つ早朝の楽しみが増えたことを大いに喜びたいと思う。2017/11/26(日)16:35

No.474: Dewey's Writing and Compositional Algorithms

I highly appreciate and respect Dewey's clear writings. His argumentation is crystal clear to understand.

One of the benchmarks of insightful writings to me is whether the writing stimulates my thoughts or not. It often provokes trivial thoughts or irrelevant thoughts to the contents of the writing. In fact, while I was reading Dewey's writings, I became interested in each composer's unique compositional algorithms. Every composer has and utilizes inherent and distinctive compositional algorithms to compose music. I will explore them to cultivate my compositional skills. This kind of finding derived from Dewey's writings. 09:43, Tuesday, 12/5/2017

1830. マリア・ジョアン・ピレシュのコンサート(前編)

昨夜は一つ夢のような体験をした。国際的なピアニストであるマリア・ジョアン・ピレシュのコンサートに参加する機会に恵まれた幸運に、私は大きな感謝をした。

昨日の夜の六時過ぎに自宅を出発し、フローニンゲン駅の近くにあるコンサートホールまで歩いて向かった。よくよく考えてみれば、歩いた場所にこのようなコンサートホールがあり、そこで今回のように、世界的なピアニストの演奏を聴くことができるというのはどこか不思議な感じがする。

幸いにも、自宅を出発した時点では雨が止み、私は、すっかり暗くなったフローニンゲンの街を歩いて会場に向かっていった。この一年半の間に私は何度も旅に出かけた。それは欧州の各国を訪問することやオランダ国内の旅行が含まれる。コンサートホールに向かうまでの私の気分は、どこかそうした旅の出発時のものと同じだった。

これから始まる何かに対する大きな期待。それでいて、そうした期待を包むかのような静かな静寂が内側にあった。

ピレシュのコンサートが始まる前に、曲目の解説に関する一時間弱のセミナーがあり、それに参加することにしていた。コンサートホールに到着すると、ここを訪れたのが初めてであったため、本当にこの場所にピレシュがやってくるのか若干気がかりだった。しかし、彼女のポスターが会場内に貼られていたために、本当にこの場所で彼女が演奏するのだと理解した。

コンサートホールは手入れが行き届いており、入り口の左手にあるバーや入り口の正面にあるレストランはお洒落な雰囲気を出していた。私は手荷物を預け、曲目解説のセミナーに参加することにした。開始20分前にセミナールームに到着したため、私が一番乗りであり、スクリーンが一番見やすい席を確保した。この部屋自体は小さかったが、50名分ぐらいの椅子が綺麗に配置されていた。セミナールームでしばらく待っていると、続々と人がやってきて、程なくしてセミナーが始まった。

プレゼンターが一言めを発した瞬間に気づいたが、このセミナーは全てオランダ語で行われることになっていた。プレゼンターを務めたのは、知性的な印象を漂わせる中年の女性であった。彼女の説明がオランダ語であったため、説明の多くはわからなかったが、曲目の背景や着目点が何なのかの大枠は掴めたように思う。

これはよく私が美術館を訪れる時に目撃することだが、子供を含め、美術館を訪れる人たちがガイドに作品解説をしてもらっている姿をよく眼にすることがある。そこでいつも思うのは、確かに自分なりの方法で作品を鑑賞することにも意義はあるだろうが、専門家に知識と観点を与えてもらい、その

上で各人のやり方で作品を鑑賞していくことは、作品鑑賞をより深いものにしてくれるということだ。それと同じことが音楽鑑賞にも当てはまるだろう。今回のセミナーを通じて、改めてそのようなことを思った。

セミナーが終わると、これからいよいよピレシュのコンサートが始まるのだという期待感が沸々と高まってきた。セミナールームを後にし、もう一度一階のロビーに降りてみると、そこにはチケットを提示して会場に入ろうとする人の列が見えた。また、会場脇のバーやレストランには先ほどよりも多くの人がおおり、彼らはコンサート前の飲食を楽しんでいた。これから何か夢的一幕が始まるかのようであった。2017/11/27(月)07:49

No.475: Music Education for Composition

I want to do academic and practical exploration for music education. Especially, I am intrigued by education for music composition. I am wondering about why music composition is not often taught. Recently, computer program has gradually been taught at school, yet music composition has not.

Like many kids can find joy in computer programming, they will probably find it in music composition. As well as computer programming, learning music composition is a step-by-step process. Many kids can learn music composition and discover the joy of creating music. My ardent interest lies in education for music composition. 10:20, Tuesday, 12/5/2017

1831. マリア・ジョアン・ピレシュのコンサート(後編):鳴り止まない拍手と終わりなき感動の中で

昨夜のコンサートが終わったのは、22:30辺りであり、そこから自宅に戻って就寝できたのは23時過ぎであった。それでも今朝は七時前に起床し、七時過ぎから今日の仕事を始めることにした。

昨夜のマリア・ジョアン・ピレシュの演奏がまだ自分の内側に残っているかのようなのである。つまりまだ、私は夢の中の世界にいるかのような感覚に包まれているようだ。

「世界とは夢だった」と言われても、今の私は何も不思議に思わない。まさにこの世界は夢のようであると思う。夢を見ているかのような意識が続く中、昨夜の夢のようなコンサートを振り返っている。

曲目解説のセミナーを終え、一階のロビーに行くと、そこで偶然知人の日本人の方にお会いした。その方に話を聞いて驚いたが、私はこのコンサートホールは数百人ほどの収容人数だと思っていたが、1200人ほどの収容人数を持っているらしい。

今回私は初めてこのコンサートホールに足を運んだが、その方は週に二回はクラシック音楽を鑑賞しにここに来ているらしい。その場で少しばかり立ち話をし、その方とその場で別れ、私はホールに入り、自分の席を探した。

演奏舞台が照明で神々しく照らされている。オーケストラ用の器具が諸々準備されており、それらが舞台の上で照明に照らされている。その姿は、ピレシュとブレーメン・ドイツ室内フィルハーモニー管弦楽団との共演がこれから始まることを静かに告げていた。

事前にホールの見取り図を眺めていたため、自分の席をすぐに見つけることができた。今回予約した席は、“Gold Class”と呼ばれるものの一つ下の“First Class”のものであったが、後者は前者よりも段差が高い場所に席が配列されており、大柄なオランダ人の聴衆によって視界が避けられることを防ぐ意味でも、私にとっては好都合であった。

私の席は舞台から近くすぎず、遠すぎずの距離にあり、舞台全体を眺めることができる。自分の席に到着すると、私の両隣の席には、すでにオランダ人の夫婦が二組座っており、簡単に挨拶をした。

会場入りからコンサートの開始までは時間が短く、それほど待つことなく管弦楽団の演奏者が舞台に姿を現した。それと共に、会場には拍手が巻き起こった。管弦楽団の演奏者が舞台に姿を現し、各々の席に座ってしばらくしたところで、指揮者のパーヴォ・ヤルヴィが颯爽と舞台に姿を現した。その時、先ほどよりも大きな拍手の渦が会場を包んだ。

この小柄なエストニア人の指揮者に、会場中の視線が注がれていた。指揮者のヤルヴィの合図と共にフォーレの交響曲が始まり、そこから私は夢のような世界に入っていった。フォーレの交響曲が終わると、舞台の隅に置かれていたピアノが舞台の中央に動かされた。それは、いよいよピレシュが登場することを示していた。

ピアノが舞台の中央に動かされる姿を見ていた観客は、皆私と同じようなことを考えていることが察知され、一様に期待が高まっていたように思う。会場の高まる期待に呼応するかのように、ピレシュが照明で光り輝く舞台にゆっくりと姿を見せた。すると、会場は先ほど以上の大きな拍手の海に包まれた。

指揮者のヤルヴィはとても小柄のように見えたが、ピレシュはもっと小柄だった。しかしひとたび演奏が始まると、ピレシュの発するピアノの音は、その小柄な身体からは想像できないような形で観客の意識を包んで行った。このピアニストの持つサトルエネルギー、あるいはコーザルエネルギーのようなものを私は肌を通じて感じ、彼女が発するエネルギーの中に包まれていたように思う。

演奏とはエネルギーの表現であり、エネルギーの共有なのだ、ということを私は静かに思っていた。曲目がピレシュの十八番であるモーツァルトの楽曲であったこともあってか、大きな安堵感に包まれ、夢の中にいるような感覚がさらに強まり、夢のさらに奥にある夢の中にいるような感覚に陥っていた。

それから二時間、私は瞑想的な意識であり続けた。時に舞台の中央で演奏をするピレシュの姿だけを見つめ、時に管弦楽団だけを無心で眺めていた。そして、無心となって演奏者たちと一体となることに平行して、私は絶えず何かを考え続けていた。感動の中にあってもずっと何かを考え続けていたのである。

それはこれまでのこと、これからのことであった。

途中で休憩を挟み、二時間以上にわたる演奏が終焉に差し掛かっても、私はまだ夢の中にいるような感覚であった。ピレシュが最後の音を会場に届けた時、全てが終わった。その瞬間、観客たちはおもむろに立ち上がり、スタンディングオベーションを始めた。一向に鳴り止む気配のない拍手。小柄なピレシュがお辞儀をし、一旦舞台から去ってもまだ拍手は鳴り止まない。再びピレシュが姿を表し、再度観客全員に向けてお辞儀をし、静かに舞台を去っていった。

しかし、観客たちはそれでもまだスタンディングオベーションを送り続けている。すると、ピレシュがまたしても舞台に姿を見せ、今度はお辞儀をするだけではなく、ピアノの方に向かって歩き始めた。

そして、静かにピアノの椅子に腰掛けた。そこから、後半の部でピレシュと共演をしていたもう一人のピアニストである、ベルギーのジュリアン・リベールと共に連弾を始めたのである。

演奏を始めた曲は、おそらくモーツァルトが姉のナンネルと一緒に弾くために作曲した曲だと思われる。舞台の上に残っていた管弦楽団の演奏者たちがその場で見守る中、ピレシュとこの若きピアニストであるリベールの最後の演奏が始まった。それは会場中を静謐な感動で包んだ。

二人の連弾が終わった時、会場にいた観客は静かな感動で身動きができないかのようにであった。少しの沈黙があり、再び観客たちは立ち上がり、スタンディングオベーションを二人のピアニスト、そしてブレーメン・ドイツ室内フィルハーモニー管弦楽団の全員に送った。

演奏が終わり、会場を後にしても私はまだ夢の中にいるような感覚があった。この現実世界を一つの夢として深く生きること。そのような誓いが生まれた。

フローニンゲンの冬の夜空は美しかった。きらめく星々が、私のこれからの生き方に新たな光を照らしてくれているかのようにであった。2017/11/27(月)08:55

No.476: Creative Addiction

I may be addicted to music composition. It can be called “creative addiction,” which derives from the joy of creation.

Most of my daily activities are just writing or composing. I do not want other things. My desire is just continuing to write and compose. The twos are all I want and vital forces for my living. 15:04, Tuesday, 12/5/2017

1832. 幸福への小さな工夫と心がけ

雨、また雨。そして雨。

今日もここ連日のように雨が降っている。先日、行きつけのチーズ屋に立ち寄り、店主と立ち話をしていた時、彼女は今年は雨がそれほどでもないと言った。しかし私は全く逆に、今年は例年以上

に雨が降っていると思うと述べた。一週間に晴れの日が一日だけであり、しかもその日は一日中完全に晴れなのではなく、必ず通り雨が伴う。

今、私はこうした環境の中で日々を過ごしている。今週末からは最低気温がいよいよマイナスの世界に突入する。しかし不思議と、今が冬なのだという実感がそれほどない。というのも、秋というのを通過して、夏からすぐに冬に移行したかのような感覚があったからだ。

フローニンゲンも夏でも涼しく、結局今年は半袖で外に出かけたことはほとんどなかったのではないかと思う。五月末まで手袋とマフラーを着用し、短い夏の期間を経て、気づけば冬になっていたという感じなのだ。

カレンダーを確認すると、早いもので12月に入る。今年もあと一ヶ月ということだ。

昨日、ドイツに住む日本人の知人の方からメールをもらった。その方は今年からドイツのフランクフルトで暮らし始め、フランクフルトもすっかりと寒くなっているようだ。私はその方に、五月末から六月の初旬にかけて、これから寒く暗い冬の時代が続くことを伝えた。すると、その方は返信の中で、過酷な冬を経験する欧州の地域の人々は、そうした寒く暗い冬の時期だからこそ、様々なイベントを生活の中に取り入れたのだろう、ということ述べていた。その言葉を受けて、私は少しばかりハッとするような思いになった。私たちは、生活環境がどれほど厳しかったとしても、工夫を凝らし、そうした生活に幸福感を見出すことができるのだ。

オランダでは、12月にサンタクロースだけではなく、シンタクロースもやって来る。シンタクロースが訪れるのは、そういえば来週の今頃である。こうしたイベントも、少しでも過酷な冬を乗り越えるための工夫なのかもしれない。何もこうしたイベントを設けるのみならず、私たちは日々の小さな工夫と心がけ次第で、生活の色が一変すると思うのだ。つまり、小さな工夫と心がけがあれば、日々の生活の中に幸福感を見出すことは可能なのではないだろうか、ということだ。

幾分感傷的だが、今日の前に降っている雨を、例えば別れの涙だと捉えることはできないだろうか。それは別れを惜しむ涙というよりも、これまで共有した時間と思い出を振り返りながら、自然と込み上げてくる涙である。

同じ時間を共有し、そこで一つの思い出が育まれることへの感謝の念に対して自然とこぼれる涙。もしかすると私は、欧州で冬を過ごすことはしばらくないかもしれない。そんな私に対して、天は涙を流している。天に対して、私も同じ気持ちを持っている。

来年、仮に米国で再び生活を始めたら、そこでの生活はとても長くなりそうだという予感がしている。少なくとも七年間ぐらい、あるいは十年間ぐらい米国の地で生活をするかもしれない。しかし私は、そこから再び欧州の地に戻ってきたいと思う。これまで訪れた欧州各国の様々な土地を、四年おきに転々と移りながら生活を営んでいく。そうした生活を何十年送るかわからないが、そうした生活が待っていそうだという予感がするのである。

私の魂は一箇所に留まれない。遍歴性こそが私の魂の本質であり、その本質に則った生き方をしたいと思う。いつか自分の魂が安住するまで、私は今日もこれからも、絶えず歩き続けたいと思う。

2017/11/27(月)10:37

No.477: Music as a Universal Language

English is a dominant language all over the world, but it is not universal. Although Esperanto is the most neutral and auxiliary language, it is still minor and not universal. I think that we, human beings, do not possess any universal natural language.

I often utilize Japanese and English as a natural language in my daily life, but I already notice that these two languages do not enable me to express my inner world in a universal way. However, I believe that music enables me to do so because it is the only universal language for us. I want to compose music that represents universal truth, goodness, and beauty. 15:13, Tuesday,

12/5/2017

1833. データの定量化に関するアイデア

闇夜の中を降りしきる雨を見ながら、今日の振り返りを行っておきたい。今日は午後の三時半から、研究アドバイザーのミハエル・ツショル教授と、同じ研究グループに属する友人のハーメンと三人でミーティングを行った。前回から二週間ほど間が空き、久しぶりのミーティングとなった。このミー

ティングは、ツシヨル教授の配慮もあり、あえて研究室で行うのではなく、よりインフォーマルに大学のカフェテリアで行うことになっている。

今日もキャンパス内のあるカフェテリアでミーティングを行った。ミーティングの開始時刻よりも数分早くカフェテリアに到着すると、ツシヨル教授とハーメンはすでにディスカッションを始めているようだった。ハーメンがツシヨル教授からいくつか意見を求めたいことがあり、30分早くからミーティングを始めようとした。

ハーメンの研究は大変興味深く、私も着目しているゲーミフィケーションに関するものである。より詳しくは、ハーメンは、ゲームあるいはゲーム的な要素が学習に及ぼす効果について研究をしようとしている。今回の私の研究はゲーミフィケーションに関するものではないが、ゲーミフィケーションが持つ教育効果やゲームを活用した学習のラーニングプロセスには大きな関心がある。

今日のミーティングはとりわけ、自分の研究をさらに前へ進める上で有益であった。ツシヨル教授とハーメンが30分早くディスカッションを始めてくれていたおかげで、公式的なミーティングが始まってから丸々一時間ほどが私の研究に関するディスカッションとなった。

ツシヨル教授とハーメンからももらったフィードバックやアイデアは非常に有益であり、とりわけデータの定量化に関して一歩先に進むことを可能にするものだった。私は当初、MOOCsのレクチャーの一つ一つのセンテンスを定量化し、それを時系列データにして「トレンド除去変動解析」を適用し、毎週の数あるレクチャーの一つ一つに対してそのフラクタル次元を明らかにしようとしていた。さらには、レクチャーのフラクタル次元のみならず、毎週のレクチャーに対する受講者のコメントを定量化し、その時系列データに対してトレンド除去変動解析を適用することによって、フラクタル次元を明らかにしようとした。

ここからさらに、二つのフラクタル次元の相関関係と、レクチャーが受講者のコメントに先行しているという性質上、レクチャーのフラクタル次元が受講者のコメントのフラクタル次元に与える影響について分析をしようと考えていた。その際に、レクチャーと受講者のコメントのセンテンスをどのように定量化していくかについて様々な方法が思いつきながらも、どの方法を採用しようか迷っていた。最も簡単な方法はセンテンスの語数を数えることによって定量化する方法である。しかしこの場合、

発見事項のインプリケーションがあまり明確にならないため、この案を採用することをやめた。ツショール教授から言語学における発話分析手法をいくつか教えてもらったが、今回のデータ量が膨大なものであるため、それらの手法は一旦持ち越すことにした。

その次に、センテンスの中にある概念を数え上げるという案が出た。これも非常にシンプルであり、定量化が楽に行え、なおかつ測定者間信頼性も非常に高くなることが予想される。しかしこの案も、先ほどの案よりはインプリケーションが明確だが、研究の筋書きとしてあまり強いインプリケーションを得にくいことがわかった。ミーティングの中でいくつかの切り口を与えてもらうことができ、定量化の方法はいくらでもあることに気づくことができた。あとは自分が今回の研究を通じて何を明らかにしたいのかをもう一度明確にし、その目的に合致したシンプルな方法を選択するのが良いだろう。

ミーティング後、自宅に向かう最中に、センテンスに盛り込まれた概念を単に数え上げるのではなく、レクチャーに関係する概念の数を数え上げる方法が一番望ましいのではないかと閃いた。この案によって定量化を行い、生み出された時系列データにトレンド除去変動解析を適用してフラクタル次元を明らかにすれば、これは先ほどの二つの案よりも多くのインプリケーションが得られるような気がしている。

明日もまた引き続き、データの定量化の方法について考えを巡らせたいと思う。正直なところ、今回の研究はこの定量化のアイデアさえ明確になれば、あとは非常にスムーズに研究が進むと予感している。2017/11/27(月)21:02

No.478: Like a Wandering Troubadour

I cannot repress the enormous amount of my creative energy to keep a diary and compose music. I will keep a journal and compose music, traveling and living all over the world someday. It may sound unworldly, but that is my ideal lifestyle. Living in a rural area in Northern Europe, I want to lead such a life.

I will keep a diary and compose music everyday like a wandering troubadour does moving around the world. Perhaps, it comes true someday soon. 15:51, Tuesday, 12/5/2017

1834. 時系列データの解析について

昨日は随分と研究に関するメモを英文日記の方に書き留めていたように思う。今回の研究はMOOCsに関するものであり、非線形ダイナミクス的手法を活用することによって、MOOCsのコンテンツと学習者の学習プロセスに潜む複雑性の関係を明らかにしたいと思っている。

データベースを活用してみると、MOOCsに関する研究分野は、2009年あたりから生まれたものであり、まだ10年にも満たない研究領域だ。「MOOCs」というキーワードでデータベースを調べてみると、わずか500本ほどの論文しかヒットしなかった。それら全ての論文のタイトルと概要を確認し、自分の研究を進める上で目を通しておくべきものはどれくらいあるのかを調べた。

昨年一度、フローニンゲン大学のMOOCsのチームのある方からいくつか論文を勧められていた。それらの論文に引用されているいくつかの興味深い論文や、自分の関心に沿う形でキーワードを組み合わせ、以前にも何本かの論文を入手していたが、その際に読んでいた論文の数は、およそ20本ほどであった。

今回のデータベースの検索を通じて、さらに25本ほど興味深い論文を見つけた。そのうちの8割は今回の研究に関係するものであり、残りの2割は今回の研究とは関係がないが、自分の関心に合致するものである。

今日は午後から、それら25本の論文の概要のみならず、その中身をざっと全て確認し、プリントアウトすべき論文はどれかを特定していく。10本から15本くらい印刷すべき論文が見つかるのではないかと期待している。それに合わせて、今回の研究で用いる「トレンド除去変動解析」に関する論文をもう少し入手しておく必要がある。厳密には、時系列データからフラクタル次元を特定する手法に関して、トレンド除去変動解析以外にもいくつかの手法があるため、それらの手法に関する論文を入手しておく必要がある。

時系列データからフラクタル次元を特定することに関して、今自分の手持ちの研究手法としては、三つほどすぐに活用できるものがあり、もう一つ頭の中に候補として挙げることもできるものがある。それら四つの手法にはそれぞれメリットとデメリットがあり、今回の研究の目的やデータの性質上、どれが最も望ましいのかを判断する必要がある。その際に、それらの研究手法を比較した論文は非

常に優れた文献価値を持っており、幸運にもそうした論文が一つか二つ手元にあるため、それらを今後また読み込んでいく必要がある。一方で、四つのうち、これまで一度も実験をしたことのない手法があるため、それらの手法については一度実際に手を動かしながら活用してみて、その手法のメリットとデメリットを体験的に掴んでいくことも必要になるだろう。

その手法は、「マルチフラクタルトレンド除去変動解析」と呼ばれるものであるが、この手法についてはそうした体験的な理解と合わせ、もう少し関連論文を集めておく必要がある。そこからさらに、それら四つ以外に、時系列データからフラクタル次元を特定する手法はないかを調べておく必要がある。

時系列データの解析は、主に数学や統計学の領域に属するものであり、私が意識していない水面下で時系列データの解析に関する研究は日進月歩で進んでいる。そうしたこともあり、もしかすると、あと一つや二つ新たな手法を見つけることができるかもしれない。

人間の発達にせよ、学習にせよ、さらには音楽研究を行うに際しても、時系列データの解析は大きな貢献を果たしうるため、ここ数年の私は時系列データの解析に多大な関心を寄せ続けている。これまでは研究を通じて、実際にいくつかの手法を適用する中でその理解を深めてきた。しかし、そろそろ一度、時系列データの解析を体系的に学ぶ必要があることを理解している。来年所属することになるかもしれない米国の大学には、時系列データの専門家が多く存在しており、時系列データの解析に関するコースもいくつか提供されている。そうしたコースを通じて、時系列データの解析手法の理論的理解と技術的理解を深めていきたい。2017/11/28(火)07:42

No.479: Extemporaneous Music Composition

I read the half of the collected works of John Dewey. Although I do not understand the details of his philosophy, but I gradually grasp the flavor of his philosophical system. It stimulates my mind without doubt.

I was wondering about the constantly changing reality with multiple colors. I hope to extemporaneously compose music someday to capture the multicolored reality at that moment. To actualize it, I need to learn various compositional techniques and to apply them as freely as

possible like breathing air or drinking water. I endeavor to assimilate and digest unique philosophies and techniques of the previous great composers who inspire me very much. 16:30, Tuesday, 12/5/2017

1835. アルベルティ・バスの適用実験

時刻は午前八時を迎えようとしているが、辺りはまだ暗い。遠くの空がようやく青みがかかってきたが、この瞬間の世界を朝だとまだ形容しがたい。

家の前の通りを一台の車が走り去った時、師走の足音が迫ってきていることを伝えた。あと少しで12月となり、今年最後の月を迎える。

今年も日々多くのことを経験しながら生きてきた。一年間の大きな振り返りを今年最後の最後に行くかもしれないため、今はまだそうした振り返りをあえて行わないようにする。いや、振り返りをしようと思っ
てする振り返りほど無意味なものはないため、私は年末に今年を振り返ることなどしないだろう。振り返りとは、そこに向かうものではなく、それがすでにこちらにやってくるものだと思うのだ。つまり、振り返りをしようと思っ
てこちらから振り返る対象に向かっていくようなものではなく、振り返る対象がこちらに向かってくる結果として生じるのが真の振り返りだろう。

振り返ろうと思っ
て行う人工的な振り返りに何の意味があるのだろうか。少なくとも私はそのような振り返りをしない。人工的な振り返りではなく、内発的・自発的な振り返りだけをする。

昨日の作曲実践を通じて、また少し様々なことが見えてきた。今回実験的に作っている曲では、ベース部分に古典派の時代に多く活用されていた「アルベルティ・バス」という技術を適用している。過去にも何度かその技術を適用していたが、今回はより意図的にそれを活用し、アルベルティ・バスに含まれる様々なヴァリエーションを試している。

この手法の由来について調べてみると、イタリアの作曲家のドメニコ・アルベルティが愛用したことがその由来らしい。私はてっきりアルベルティが考案したからこのような名前が付いているのだと思っ
ていたが、どうも早とちりだったようだ。いずれにせよ、今作っている曲ではアルベルティ・バスを意識的に多用している。ただし、この手法をもう少しうまく活用できないかを模索していく必要が多分

にある。そのヒントを掴むために、実際にこの手法を活用している生きた事例から学ぶ必要があるだろう。

この手法が古典派の時代に多く活用されたこともあり、ハイドンやモーツァルトの曲などを参考にするといいかもしれない。すると偶然にも、モーツァルトのピアノソナタ第16番の第一楽章の冒頭にこの手法が活用されていることを知った。モーツァルトがどのような工夫を凝らしながらこの手法を活用したのかを分析したいと思う。その他にも、ベートーヴェンのピアノソナタ第18番の第一楽章やシューベルトのピアノソナタ第1番の第二楽章にもアルベルティ・バスが適用されているようなので、合わせて分析をしておきたいと思う。

この手法を用いながら、これは基本的に伴奏として用いられるものだが、ソプラノやアルトの部分に活用してみるとどうなるのかを実験したいと思う。もちろん、いくらヴァリエーションがあるとはいえ、その手法だけを活用していると、曲が単調なものになってしまうのは目に見えている。そのため、何かしらの工夫を施して、この手法をソプラノやアルトの部分にも適用していく道を探っていきたい。今作っている曲を作り終えたら、その実験に着手したいと思う。また、今回アルベルティ・バスを適用して伴奏部分から曲を作っているため、その伴奏に調和するようなメロディーをいくつか新しく作ってみたい。

ここ最近の曲はどれも、メロディーから曲を作っていたが、今回はベース部分から作っていくという違いがある。今回作ったベースに対して、どのようなメロディーが綺麗な音として聞こえるかを、自由な発想をしながら思い付く限り様々なパターンを見つけたいと思う。今後は実験的に、複数の変数が絡む数式を解く際のコツのように、メロディーもしくはベースの一方を固定し、もう片方のヴァリエーションを模索していくという実験を行ってみたい。つまり、メロディーかベースの一方を過去に作ったものと同一のものを用いて、メロディーかベースのもう片方の可能性を模索していくということだ。

毎回一から曲を創造する喜びもあるが、過去の曲を活用しながら実験的に新たな曲を作ることの中にも違った喜びがある。2017/11/28(火)08:20

No.480: Restful Soul

I hope that I can compose music someday that rests our souls.

What are the requirements to pacify our souls? The key would exist in our perception of beauty. Thus, I will begin to explore aesthetics. Aesthetics of music in particular would help me compose pacifying music for our souls. 20:08, Tuesday, 12/5/2017

1836. 日記的作曲の実現に向けて

天気予報によると、今日も雨のようだ。最低気温は0度であり、明日から数日間、最低気温がマイナスとなる。フローニンゲンの天気の特徴として、予報で雨だと表示されていても、一日中雨が降ることは稀である。そうではなく、断続的に雨が降ることが多い。時折晴れ間が顔を覗かせ、少しばかりほっとすると、また雨雲が空を覆い、雨を降らせるというような天気である。

変幻自在に変化する喜怒哀楽の感情を、フローニンゲンの天気の中に見つけることができる。この地で生活をする中で、より情緒が育まれていくような感覚があるのは、もしかするとこのような天気の特性によるものかもしれない。

起床してからいくつかの日記を書き留め、コーヒーを入れに食卓に向かったとき、ふと外の景色を窓から眺めると、冬の空とは思えないような、甘美な薄青色の空が広がっていた。それはロマン派の音楽で表現され得るかのような空であり、印象派の絵画で表現され得るかのような空だった。

これほどまでになめらかな青色を見たことがないと言っても過言ではない。それは丸みを帯びた青である。こうした空を眺めることができるのは滅多にないことだと思ったため、私はしばらくコーヒーを片手に空を眺めていた。それは、東の間の休息をもたらす甘美な冬の空だった。

そこから私は、日記を書くように作曲を行うという理想に向けて考えを巡らせていた。今見た、青い空を瞬時に曲として表現できなければ意味がない。通りを走るバスが水しぶきを上げて走っているその姿を曲として表現できなければ意味がない。小鳥が大空を舞っている姿を曲として表現できなければ意味がない。そして、それらの象徴が私の内側にもたらす無限の思考、感情、感覚を曲として表現できなければ全く意味がない。

私が作曲をする最大の意味は、日々のその瞬間瞬間に自分の内側の世界に姿を表す存在者の生命を曲の形としてこの世界に残していくことだ。言ってみれば作曲は、全ての事物と私の内側の

世界との交流の全過程を映し出すものでなければならない。ただその実現に向けて曲を作る。その他の意味など特にない。

この世界で他の存在者と交流をしながら生きていたということだけを曲として記録していくのである。だからこそ、その瞬間瞬間に五感で感じられる全てを音楽言語に変換し、曲として表現できなければならないのだ。

画家が外的風景や内的風景を絵として描写するように、それらの風景を曲として描写していくのである。青色と薄青色の違いが曲として表現できなければ全く意味がなく、秋のリンゴと冬のリンゴの味の違いが曲として表現できなければ全く意味がない。

「堅牢」と「強固」という語彙の間に存在する語感の違いを曲として表現できなければ全く意味がない。この世界で自分の内側に生起する全ての差異を曲として表現していく。それらの差異こそが、存在者の固有の生命だ。音楽言語を用いてそのようなことを実現させていくことの道のりは、途方もなく長く険しいだろう。それでもその道を進んでいこうと思う。

書斎の窓際に体を寄りかけて考えていたのは、「このような外的・内的現象はこのように表現する」という無数のパターンを自分の内側で構築していくことが大切だということだった。外的・内的現象を断片的に音楽言語として表現することができたら、それらの現象にまつわる物語を一曲全体という形にしていく必要がある。この時にも、「こうなったらこうする」「このように音符を配置したらこうする」というパターンを少なくとも千個、あるいは一万個ほどまずは自分の内側に確固とした形で構築していくことが必要になるだろう。それらの無数のパターンは、明示的に言葉で説明できなければ全く意味をなさない。

感覚は常に言葉に先行しており、言葉を磨くことによって感覚を磨いていく。一つのパターンを言葉で説明できたら、それはすでに自分の内側の感覚の中にはそれ以上のパターンがあるということの証だ。無数のパターンを感覚として捉え、感覚的に活用できるようになるためには、言葉の及ぶ限界ギリギリの境界線まで徹底的に言葉としてパターンを認識していかなければならない。

無数のパターン認識とその言語化の実践を、これからより一層激しく自らに課していきたい。そうすれば、先ほど見た甘美な青空を含め、この世界に千変万化する森羅万象と自分の内的世界の交

流を変幻自在に曲として表現できる日が、いつか必ずやってくるように思うのだ。2017/11/28(火)
09:21

No.481: Reading: John Dewey's Educational Philosophy

Like I was doing yesterday, I am continuing to read the collected works of John Dewey. The chapter five is about Dewey's philosophy of education that is my central interest to read.

After I read "My Pedagogic Creed (1897)," I realized that I would have to read this chapter again and again. I will continue to read the rest of the chapter about his philosophy of education. 08:45, Wednesday, 12/6/2017

1837. 文献調査の進展

今日も断続的な雨が降り続ける一日だった。しかし幸運にも、午前中に「システムティックレビューの執筆方法」のコースに向けて自宅を出発した時は晴れており、クラス終了後も晴れ間が広がっていた。こうした一瞬に現れる晴れの姿は、私の心に爽快感を吹き込み、開放的なものにしてくれる。翻って夜の八時を迎えた今はまた、ポツリポツリと静かな雨が降っている。

本日の午前中に参加した、システムティックレビューに関する第三回目のクラスはいつもと同じように大変実りの多い内容だった。前回に引き続き、受講者はジョージア人のラーナと私の二人だけだが、クラスの人数が少ない分、絶えず担当教授と密な質疑応答ができることは喜ばしい。

前回は、実証教育学のプログラム長を務めるマイラ・マスカレノ教授がクラスを担当したが、今日はマヨレイン・デウンク教授がクラスを担当した。有り難いことに、クラスの最初の30分間は、初回と第二回目の課題に関して私が持ち寄った六つの質問に関するディスカッションを三人で行う時間となった。大人数のクラスでは、このように私一人の質問に30分という時間を割くことなど不可能であるため、このような少人数のクラスの恩恵を改めて強く感じる。

こうした状況と全く同じなのが、今週の木曜日に行われる「応用研究手法」のコースである。このコースも、ラーナと私しか受講者がいないため、担当教授のロエル・ボスカー教授と毎回密なディスカッションを行うことができる。

本日のクラスでは、文献調査の際のデータベースの活用法の中でも、とりわけどのような観点でキーワード検索を行っていくかをまず学習した。これまであまり意識することなくキーワード検索を行っていたが、本日のクラスを通じて、実際にはキーワード検索とは奥深いものであることを思った。

自分の検索方法を見直さなければならない。今回のコースがシステマティックレビューの執筆に関するものである都合上、大量に集められた文献に対して、どのような基準で論文を選定・除外していくかをより深く学ぶ必要がある。

このコースが秀逸な理由は多々あるが、その一つとして、クラスで学習した観点や理論を即課題の中で適用することが要求されていることにある。いつも私はクラスが終わったその日か次の日に課題に取り組むようにしており、学習した観点や理論を、実践を通じて学び直すことができる機会があることに対して、いつもその意義を感じる。

概念的なものであればあるほど、とかく実践をないがしろにしがちであるが、そうではなく、むしろ概念的であるからこそ実践を通じて学習を進めていくことがとりわけ重要になる。これは日々の学術探究や作曲実践を通じて痛感することである。

今日はクラス終了後、夕方からMOOCsに関する査読付き論文をデータベースで検索をし、500本ほどの論文に対して、そのタイトルと概要を確認し、自分の研究に活用できるものを精査していった。500本のうち、7本ほどが必読のものであることがわかり、それらを印刷するしてこれから読み込むことにした。先ほどMOOCsの論文に対して行ったことを、明日はフラクタル分析の手法に関する論文に対して行う。そこでもまた、自分の研究に活用できる10本ほどの査読付き論文を得ることができれば幸いだ。2017/11/28(火)20:14

No.482: Learning Material as Spiritual Food

From today's reading, the most inspiration term coined by Dewey was that learning contents should be "spiritual food." Learning material should be alive and must nurture our souls. Both children and adults in this modern world tend to learn too much dead knowledge. Yet, knowledge is inherently alive with vital energy to cultivate and awaken us. 08:53, Wednesday, 12/6/2017

今朝は六時前に起床し、六時から今日の仕事に取り掛かり始めた。早朝の様子はいつもと変わらず、静けさと共に深い闇が辺りを包んでいる。

昨夜見た夢について少しばかり書き留めておきたい。夢の中で私は、今から何十年か経った後に再び日本で生活をするようになっていた。それは遙か先のことであり、気が遠くなってしまうかのような遠くの未来であった。

日本で生活を再開させた私は大きな感動に包まれていた。日本で見ると一つ一つの情景が生まれて初めて目にするかのよう思え、目に映ると一つ一つの事柄に大きく心を打たれていたのである。また、日本の風や音など、自分の魂に深い安らぎをもたらす現象に私は大きく感動していた。

夢の中の季節は春だったのだろうか。桜の香る季節に私は再び日本で生活をするようになった。

あの暖かな陽気、その陽気に包まれながら輝く桜の木々に対して、私は大きな感動を経験していた。桜の木々の輝きとその香り、そして春の風の音とその暖かさに身を包まれた時、目頭が自然と熱くなった。

「再び母国で生活をするようになったのだ」という言葉の中には、表現できない感情が混じっていた。今から数十年後のその時において、日本は異国の地であるかのように感じられた。しかし、異国の地であるように思えながらも、消え去ることのない母国性がそこにはあった。

自国が異国であると思えた瞬間、強烈な母国性が姿を表す。夢の中の私は、そうした強烈な母国性に自分の全てを包まれていたのだと思う。

春のうららかな世界の中に優しい風が吹く。桜の花々がそよ風にそっと乗ってどこかに運ばれていく。私は感動で見開いた眼でその様子をただただ眺めていた。

感動の中で私は夢から覚めた。今から遙か先に、日本で再び生活をする事になり、その時に味わうことになる体験を先取りするかの様な夢だった。

母国が異国として感じられることの脅威を超えたところに、究極の母国性があることを知らせる夢だった。究極の母国性を見つけた時、感動に包まれるのと同時に、感動が自己の奥底から滲み出すのだということを知る。それはすなわち、日本から離れて生活をすればするほどに、日本へ近づくということの意味しているのではないだろうか。きっとそうだと思いたい。

そうであってほしいという願い。究極の母国性を見出すことができるまで、おそらく私は日本に帰れないのだと思う。母国で再び生活をする日は限りなく先のこともかもしれない。だが、その日がいつかやってくるということもまた確かなことであるように思える。

早朝の闇の中を走る一台の車の音。その車が通りを過ぎ去っていく音の全てを聞き終えた時、そこに存在する刹那に気づく。刹那を積み重ね行った道の遙か先に、母国に帰る日が待っている。そのように思うことしか今の自分にはできなかった。2017/11/29(水)06:51

No.483: Ceaseless Map-Making Activities

I am constantly engaging not only in meaning-making but also map-making activities. At this moment, I am keeping a journal, which is also a part of map-making activities. Composing diary-like music is another example of my map-making activities. The maps that I create derive from my personal experiences, but I expect that they can serve for others someday because our maps contain universal dimensions of human experience. For now, I will just focus on making an innumerable number of maps everyday. 09:06, Wednesday, 12/6/2017

1839. ゴッホの手紙

昨夜から、先日届いた全六巻のゴッホの手紙を読み始めた。この全集には弟のテオと交わされた手紙のみならず、ゴッホが親しい友人に送った手紙も掲載されており、現存する全ての手紙をこの六巻を通じて読むことができる。

手紙の内容に関係する絵画の作品がフルカラーで掲載されており、それはゴッホの作品はもちろん、ゴッホが感動を覚えた他の画家の作品の写真も掲載されている。また、手紙の文脈理解を促進するために、丁寧な注記が挿入されていることも、この全六巻の文献の価値を高めている。

書籍を購入する際には、いつも一つ一つの書籍の価値を感じるのだが、この全六巻の価値は極めて大きいと実感している。掲載されている手紙のうち、元々の手紙は数通ほどが英語で執筆されており、600通ほどがオランダ語、300通ほどがフランス語で執筆されている。

この全六巻の書籍は、アムステルダムのゴッホ美術館の協力とゴッホ研究者との協働作業により、全ての手紙が英語で読める作りになっている。ゴッホは、テオへの手紙の中で難解な言葉を使うことをせず、平易な言葉で自らの日々の体験やその過程を通じて考察した事柄などを書き残していった。

昨夜、第一巻の最初の手紙から一つ一つゆっくりと読み進めている中で、平易な言葉の中に滲むゴッホの思想を感じた。最初の手紙が執筆されたのは、ゴッホがまだ二十代の後半の時であるが、その時にすでに晩年のゴッホが体現していた思想の萌芽を見ることができる。

昨夜読み進めていた手紙が書かれた時期において、ゴッホはまだ画家としての目覚めを経験していなかった。一体何を転機に、いつどのようにしてゴッホは自らの天命が画家として生きることだということに気づいたのだろうか。手紙を読み進める中でその瞬間に立ち会うことができるであろうことは、大きな感動の先取りのように思える。

これから読み進めていく手紙の中で、ゴッホは絵画制作に関する思想と理論を自らの言葉で語っていこう。それらの言葉には、ぜひとも細心の注意を払って耳を傾けたいと思う。ゴッホの魂の舌で語られた言葉を、自分の魂の耳で聞き取りたい。ある個人の思想や理論というのは、もちろん先人からの影響を受けて構築されていくものだが、究極的には、その個人の魂の通った道筋が思想や理論になっていく気がしてならない。あくまでも一人の人間が紡ぎ出す思想や理論というのは、その個人に固有の魂の歩いた過程が滲み出したものなのだ。

これからゴッホの手紙を丹念に読み進めることで、ゴッホが作品に込めた思想とそれを具現化させる理論と技術の細部が明らかになるだろう。また、一つ一つの手紙を追うことで、ゴッホという一人の画家の魂の軌跡を自分の魂と重ねながら理解していくことになるだろう。

不思議なのだが、ゴッホの手紙を読んでいると、ゴッホの人生を追体験しているような感覚に陥る。これは一体どういうことなのだろうか。この現象は一体何なのだろうか。

今日も仕事の合間を縫って、第一巻の続きの手紙をゆっくりと読み進めたいと思う。一つ一つの手紙を読み進めていくことに呼応して、ゴッホの人生の追体験が進み、それに合わせて自分の人生がまた一つ一つ深くなっていくように思えて仕方がない。2017/11/29(水)07:16

No.484: Transcending Self and Time

Since I began to live in Europe, I have often experienced transcending self. The experience used to be indescribable, but it has recently been verbalized.

A couple of days ago, I transcended “I” or the subject of perceiving the reality. It was a transient experience. Thinking back upon it, I found another meaning of the experience. I realized that transcending self was equal to transcending time. In addition, once I transcend self and time, I feel that both of them become more profound. 18:30, Wednesday, 12/6/2017

1840. 手紙という表現形式について

ゴッホの手紙を読み進めるのと全く同じことを過去の偉大な作曲家が残した手紙に対しても行いたいと思う。これまで折を見て、日記が自分に与える影響について書き留めていたように思う。今でも私の中では、日記という表現形式は最も大きなものとして存在している。自らが毎日絶えず日記を書き綴る中で見えてきたことが持つ意味の大きさを、私はもはや無視することができない。

一方で、日記に合わせて手紙の持つ意味もまた大きいことに気づく。日記と手紙の最大の違いは、一人の受け手がいるか否かにあるように思う。つまり、手紙においては受取人が存在しており、手紙の差出人はその人物を想定しながら、対話をするかのように言葉を紡ぎ出していく。手紙には、その性質上、一人称・二人称・三人称という人称言語の全てが内包されているように思う。ゴッホの手紙を通じて、人間が醸し出す究極的な暖かさを感じたのは、おそらく手紙という形式が全ての人称言語を包摂していることと関係しているかもしれない。

これから私は日記のみならず、手紙という表現形式にも関心の目を向けていきたいと思う。今手元には、ゴッホのみならず、作曲家で言えば、モーツァルト、シューベルト、ショパンが残した手紙の全集がある。またグリーグの手紙に関しては、その一部が収められた書籍が手元にある。残念ながら、

ベートーヴェンの手紙が収められた全集は、イギリスからオランダへの配達途中で紛失してしまったようだ。そのため、また後日注文し、ベートーヴェンの手紙の到着を待ちたい。

ここ数日、ショパンが残したあるワルツの分析をしているのだが、そのワルツが作曲された時期のショパンの手紙を読んでいくと違った発見があるだろう。そうすることによって、この曲が誕生した背景を理解することにつながり、それはこの曲が持つ文脈に対する理解をより豊かなものにしてくれるだろう。

昨日はショパンの楽譜を分析しながら、「こんな発想は今の自分には全くない」という観点を数多く見つけた。楽譜を精緻に分析して初めて見えてくることがある一方で、その曲が作曲された時期の手紙を合わせて読むことで、さらに多様な観点が獲得され、作曲に関する深い理解が得られていくだろう。

自らの作曲理論を構築するために過去の偉大な作曲家の作品から学びを得る際に、楽譜から作曲の法則性を認知的に掴んでいくだけでは不十分であることに気づく。法則性の把握は認知的のみならず、身体的、あるいは存在的になされなければならない。そうしたことを補助してくれるのが、手紙という存在なのかもしれない。2017/11/29(水) 07:38

No.485: Composers' Letters and Diaries

I will read some composers' letters and diaries who inspire my soul. I already have some books that contain their letters and diaries, but I have not yet read any of them. Each of the books will definitely provide me with inspiration for music composition. One soul affects another. 21:20, Wednesday, 12/6/2017